

資 料

混乱時期における統合失調症患者の家族の体験

Family Experience of Schizophrenic Patients in Acute Confusional State

木村由美 中川佑架 天賀谷隆

Yumi Kimura Yuka Nakagawa Takashi Amagaya

獨協医科大学看護学部

Dokkyo Medical University School of Nursing

要 旨

【目的】本研究は、統合失調症患者の家族支援に示唆を得るための基礎的研究である。統合失調症患者の家族の体験を記した文献から家族支援についての記述を整理する、そして混乱時期における家族の体験を明らかにすることを目的とする。

【方法】統合失調症患者の家族の体験について記された51文献の結果および考察から、地域と医療施設、そして集団的と個人的からなる4分割のマトリックスで整理した。また研究対象文献から家族が患者の変調に巻き込まれる時期（以下、混乱時期とする）の体験が記述されている29文献を抽出し、体験の記述を抽出し類似性の観点から質的帰納的に分析した。

【結果】4分割のマトリックスで整理した結果、地域における家族の個別的支援について述べられた調査が十分でないことが明らかになった。また、混乱時期における統合失調症患者の家族の体験を記した文献を分析した結果、【家族の変調に対する対処困難】【スティグマが招く憂い】【家族のきずなが崩壊する危機】【発症に対する自責の念】【当事者との生活が限界に達してからの援助の希求】【資源に対する渴求】【医療介入により感じる緊張からの解放】の7つに集約された。

【結論】統合失調症患者の家族の支援は精神保健福祉分野の中で十分な研究の蓄積や体系立てたケアが確立されているとは言い難い。混乱時期における家族の体験を十分に理解し、入院の早期から家族の心理的側面および身体的側面に対するアセスメントをおこない家族の支援に繋ぐ必要がある。また本研究によって明らかにされた当事者の家族が抱える混乱時期の体験をもとに、その体験がどのように変化し意味づけられ、当事者と共に生活する上で家族にどのように影響しているのかといった体験の理解を深め、家族にとってどのような体験がパーソナル・リカバリーを促進するのかを丁寧に紐解いていくことが、必要な支援の在り方を検討するための一助になると考える。

キーワード：統合失調症、家族、体験、混乱時期、家族支援

I. はじめに

我が国の統合失調症患者とその家族を取り巻く環境は、2004年「精神保健医療福祉の改革ビジョン」を皮切りに、入院中心の医療から地域包括ケアへと移行している。2009（平成21）年患者調査によると、精神科病院からの退院先の6割以上が家庭復帰¹⁾であり、この中で7割以上の精神障害者が家族と同居²⁾していると報告されている。このように家族は、患者の社会復帰や社会生活を支える為には欠かせない存在である。

一方で、患者が退院できない理由の1つに家族による退院の受け入れの困難さが挙がっており、その理由は、患者の変調によって家族に生じた体験が大きな要因であることが指摘されている^{3,4)}。また統合失調症患者の家族のうち約8割の家族は、患者の変調から精神科を受診するまでの2年以上の間、精神科以外の医師や警察、そして宗教家など何らかの支援者に援助を求めながら、患者を抱えて生活している^{5,6)}。したがって、多くの家族は患者が精神科受診するまでの間の比較的長い期間、患者の変調によって生じた体験をしている。家族は、患者が退院後の地域生活において、入院前の患者との体験を想起しその体験が再燃することを危惧し、患者の退院の受け入れを困難にしていることが推察される。実際、家族会へのフィールドワークでは、発症から20年以上経過した現在でさえ、発症した当初の体験は忘れがたく症状が再燃した場合にどう対処していいかわからないといった家族の声が印象的であった。患者の変調によって生じた体験をしている家族は、患者だけでなく危機に直面しているケアの対象者として捉える必要があり、入院早期から継続的な家族ケアが重要になると考えた。

現在、医療施設で行われている家族への支援は、家族が患者のもつ疾患の理解や患者への対応などの心理教育が中心であり、より良い「患者のケアをするため」の家族に治療の協力を求める意味合いが強い。家族をケアの対象として捉えた支援は、家族会などのピアサポートが中心であるが、家族の参加は任意であるため偏り

が生じている。また、入院中においても患者の入院早期から家族が医療者からタイムリーなケアを受けることができていない現状がある。

精神疾患患者の家族に関する研究について、半澤⁷⁾は、1940年代以降2004年までの家族研究の変遷を、家族の言動や家族関係が悪影響を与えるという家族病因論（1期）をはじめとし、1970年代以降の家族の感情表出（EE：Expressed Emotion）が再発率に影響するEE研究（2期）、そして1990年代以降、家族のストレス・コーピングに関する研究（3期）に至るまでを、大きく3期に区分した。また、中坪⁸⁾は、半澤が区分した3期の研究について、統合失調症患者の家族にどのような影響を及ぼしたのかを検討した。そこでは、1期および2期について、家族療法の発展や心理教育の開発に寄与しているが、その反面、統合失調症の発症を親の責任とする社会的スティグマを浸透させており、家族の罪悪感や苦悩を生むと指摘している。そして、3期については、家族自身に目を向けた尺度開発に貢献し家族支援のために家族の経験を考慮する必要性を指摘している。田野中⁹⁾は、家族研究について諸外国との比較を通じ、現象学を含めた多様な学問による家族理解の必要性を指摘している。以上のように、統合失調症患者の家族研究の歴史的背景を概観すると、家族を取り巻く社会的および心理的な状況の複雑さがあり、家族の語りを丁寧に分析し体験を理解した上でその体験に基づいたケアを探求する研究が必要であると考えられる。混乱時期における統合失調症患者の家族については、十分な研究の蓄積や体系立てたケアが確立しているとは言い難く、家族の混乱時期における体験を十分に理解し、入院の早期から家族を継続的に支援する必要があり、この分野での探求が必要であると考えた。

本研究を、家族支援について示唆を得るための基礎的研究として位置づけ、今回、家族の体験が記された文献から、必要とされる家族支援についての記述を整理したうえで、混乱時期に焦点を当て、その時期の家族の体験を明らかにすることを目的とする。必要とされる家族支援を

記した文献を整理することで、家族支援の方法および支援を提供する場について考えることができる。また家族の混乱時期における体験を明らかにすることは、長期にわたる家族の心理的体験の理解に繋がり、継続的な家族支援に示唆が得られると考える。

II. 研究目的

本研究は、統合失調症患者の家族支援に示唆を得るための基礎的研究である。

統合失調症患者の家族の体験を記した文献を対象に、以下の内容を目的とする。

1. 統合失調症患者の家族支援についての記述を整理する。
2. 混乱時期における家族の体験を明らかにする。

本研究の意義は、家族支援についての文献を整理することで家族支援の課題を検討する一助となり、更に家族の混乱時期における家族の体験を明らかにすることは、当事者と共に生きていく家族に対しての体験に応じた支援を検討するための基礎資料となることが期待できる。

III. 用語の定義

本研究における家族の混乱時期とは、阿保¹⁰⁾らの「発病または入院時の統合失調症の症状が顕在化している時期の状態」、および田上¹¹⁾の混乱期「入院前後の時期」の定義に沿い、当事者に発症の前触れのような変調がみられてから急性状態にある入院前後の時期とし、家族が当事者への理解や対応に混乱している時期と定義する。また体験とは、ある事象に対して家族が抱いた感情や思考、またそれらに関連する行動とする。さらに、パーソナル・リカバリーとは、障害があっても充実し生産的な生活を送るリカバリーの概念の中でも、希望する人生の到達を目指すプロセスを示す。

IV. 研究方法

医学中央雑誌 Web 版 Ver.5 及び Citation Information by NII, NII 学術情報 (以下, CiNii) より、Key Word を「統合失調症」「家族」として検索した。なお、検索範囲は、2004 年「精神

保健医療福祉の改革ビジョン」および 2005 年障害者自立支援法の制定を基準に、2005 年から 2016 年までの論文を対象とした。以上の条件で検索した結果、抽出された 1116 件の文献のうち、家族の体験が記述された 51 件を研究対象文献とした。(表 1)

1. 研究対象文献 51 件の結果および考察から、家族の体験をもとに必要性が指摘されている家族支援についての記述を抽出した。抽出した支援の内容を類似性に従い支援内容として集約した。支援内容は、タテ軸 (個人・集団)、ヨコ軸 (医療施設・地域) に 4 つに分類し、マトリックス分析を実施した。
2. 研究対象文献から、混乱時期における家族の体験が記述された文献 29 件 (表 1 の文献番号 23~51) に絞り、体験の記述を抽出しコード化した。コードを類似性の観点から帰納的に分析した。妥当性を高めるため複数人の研究者で分析した。

V. 倫理的配慮

研究をすすめる上で著作権法に則り、以下の点に留意する。

1. 先行研究を引用・参照した場合には、引用参照した文献の存在を明示する。
2. 先行研究が示す知見と自らが明らかにした知見を区別して述べる。
3. 長文の引用は原則として避ける。また図表の転載等については原著者の承諾を得る。
4. 他者の行った研究成果を出典の明記をせずそのまま使用、若しくは僅かに変え使用するなど、盗用とみなされる行為はしない。

VI. 結果

医中誌および CiNii から「統合失調症」「家族」で検索した結果、1116 件の文献が抽出された。その中から、統合失調症患者の家族の体験について述べられた文献 51 件を対象に、家族の体験をもとに必要性が示された支援を抽出し類似性に基づいて支援内容を抽象化し集約した上で 4 分割で整理した。さらに、混乱時期の体験を含んだ文献 29 件の中から、混乱時期に焦点を

表1 統合失調症患者家族の体験が記された文献の概要

文献番号	発行年	筆頭著者	表題	掲載雑誌	研究デザイン	データ収集・分析方法	研究対象	研究目的
1	2016	石附 有紗	統合失調症発症から受診に至るまでの支援についての考察	精神保健シリーズ 46号 Page14-21	量的研究	診療録・記述統計	1 施設を受診した初診の統合失調症患者 148名の当事者と同伴者	1 施設を受診した統合失調症患者の調査を通して、発症から受診に至るまでに必要な支援について考える
2	2016	田中良英	精神科救急病棟に入院する患者家族の家族交流会に対するニーズ 統合失調症患者家族への質問紙調査を通して	日本看護学会論文集 精神看護 46巻 Page201-204	量的研究	質問紙調査・記述統計・自由記述は帰納的に分析	精神科救急病棟に入院中の統合失調症患者者家族 27名	精神科救急病棟に入院する統合失調症患者の家族交流会に対するニーズの実態を明らかにする
3	2015	飯塚 友美	精神科訪問看護に求められる家族支援 同居する家族への支援に関する一考察	日本精神科看護学術集会 40巻 Page532-533	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症の患者と同居する母親3名	精神科訪問看護における家族への支援のあり方を明らかにする
4	2015	山口 愛未	精神科救急病棟における家族が捉えた患者-家族心理教育の効果	日本精神科看護学術集会誌 58巻1号 Page120-121	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症にて入院中で心理教育に参加した家族7組	精神科救急病棟における患者-家族心理教育の効果を明らかにする
5	2014	松下 城司	家族が捉える統合失調症参加後のインタビューに基づいて	看護・保健科学雑誌 15巻1号 Page172-178	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症参加後の家族8組	家族心理教室に参加後の家族は、家族教室にどのような意味を見出しているのか明らかにする
6	2014	安部 秀三	統合失調症における受診経路および初発症状に関する調査	精神神経学雑誌 116巻12号 Page969-981	量的研究	構成的面接・記述統計	統合失調症と診断され治療中の本人 125名、家族74名	早期介入のための課題抽出を目的として後方視的に受診経路および受診に至る経緯、初期症状を明らかにする
7	2014	川口 めぐみ	退院後1年未満の統合失調症患者を介護している親の介護負担感の関連要因	家族看護学研究 20巻1号 Page2-12	量的研究	質問紙調査・記述統計 統計的検定	退院後1年未満の統合失調症患者を自宅介護している親78名	退院後1年未満の統合失調症患者を自宅介護している親の介護負担感に関連する要因を明らかにする
8	2014	角 和彦	統合失調症患者の社会生活能力障害のアセスメント 看護者、家族の認識の違いについて	日本精神科看護学術集会誌 57巻1号 Page492-493	量的研究	質問紙調査・記述統計 統計的検定	急性期病棟の統合失調症患者10例の家族	看護者と家族の間で生じる患者の社会生活能力の障害に対する評価の相違を明らかにする
9	2014	久保田 輝	初めて身体拘束を受けた患者の家族の思い 家族への聞き取り調査から見えてきたこと	日本精神科看護学術集会誌 57巻2号 Page136-140	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	初めて統合失調症と診断された患者の家族2組	初めて身体拘束を受けた患者の家族が、拘束についてどのような思いを抱いているかを明らかにする
10	2014	松田 陽子	精神障害者を抱える家族の精神的健康に影響を与える要因の検討	三重県立看護大学紀要 17巻 Page59-65	量的研究	質問紙調査・記述統計 統計的検定	1県内の精神障害者家族会会員 180名	精神障害者家族の精神的健康に影響している規定因子をストレス対処行動、日常生活状況などの観点から明らかにする
11	2014	高橋 未来	精神科看護領域における家族看護研究の動向	岐阜県立看護大学紀要 14巻1号 Page3-12	文献研究	医中誌検索、抽出された文献の内容を分析 動向を調査	統合失調症、気分障害、神経症、ストレス関連の疾患を持つ障害者の家族に関する内容を含む研究論文 30件	統合失調症、気分障害、神経症、ストレス関連の疾患を持つ障害者の家族に関する内容を含む研究論文に焦点を当て、今後の研究課題について検討する
12	2014	加藤 知可子	心理教育後の初発の統合失調症で急性期にある患者の家族の自己効力感の変化 グループ療法による心理教育を用いて	日本看護学会論文集：精神看護 44号 Page109-112	量的研究	質問紙調査・記述統計	グループ療法に参加したのは、男性4名、女性8名の12名	初発の統合失調症急性期にある患者の家族に対し、ストレス軽減のためにグループ療法について検討する
13	2013	山口 一	精神障がい者の家族のソーシャルサポートを測定する尺度開発	病院・地域精神医学 55巻4号 Page56-57	量的研究	質問紙調査・統計的検定	首都圏家族会に所属する会員 450名	精神障がい者の家族のソーシャルサポートを測定する尺度開発

(表1つづく)

表1 統合失調症患者家族の体験が記された文献の概要 (つづき)

文献番号	発行人	筆頭著者	表題	掲載雑誌	研究デザイン	データ収集・分析方法	研究対象	研究目的
14	2013	宮城 哲哉	統合失調症患者を抱える家族の心的外傷後ストレス障害 (PTSD) と主観的困難・負担感および精神健康との関連	琉球医学会誌 32 巻 1-2 号 Page45-52	量的研究	質問紙調査・統計的検定	入院中または精神科デイケア通院中の統合失調症患者の家族 69 名	統合失調症患者を抱える家族の心的外傷後ストレス障害 (PTSD) と主観的困難・負担感および精神健康との関連について検討する
15	2012	福島 泰輔	家族教室で実施した統合失調症罹患者家族への向けアンケート調査	病院・地域精神医学 54 巻 3 号 Page318-322	量的研究	質問紙調査・記述統計 統計的検定	1 施設の家族教室の参加者 36 名	家族教室に参加した家族の家族教室に対する評価を明らかにする
16	2010	加藤 知可子	初発統合失調症患者の家族が必要とする看護師からの情報提供に関する検討 急性期治療病棟に入院している初発患者の家族へのインタビューを用いて	日本看護学会論文集：精神看護 40 号 Page152-154	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	初発患者の家族 12 名	急性期治療病棟に入院している初発統合失調症患者の家族が必要とする情報を明らかにする
17	2009	半澤 節子	統合失調症患者の母親の介護負担感に関連する要因 患者の性別による比較	精神障害とリハビリテーション 13 巻 1 号 Page79-87	量的研究	質問紙調査・記述集計 統計的検定	精神障害者家族会単会の会員 162 例	統合失調症患者の性別による母親の介護負担感とその関連要因について検討する
18	2008	加藤 知可子	精神障害者家族が必要とする看護師からの情報提供に関する検討 精神障害者家族へのインタビューを用いて	日本看護学会論文集：精神看護 39 号 Page188-190	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	単科精神科病院 1 施設に 5 年以上入院している統合失調症患者の家族 10 名	精神障害者家族が必要とする看護師からの情報提供を明らかにする
19	2008	半澤 節子	日本における統合失調症患者の母親の負担および対処方法	Psychiatry and Clinical Neurosciences 62 巻 3 号 Page256-263	量的研究	質問紙調査・統計的検定	統合失調症患者のケアを行う母親 57 名	統合失調症患者のケアを行う母親の介護負担に寄与する要因の同定に関して検討
20	2008	半澤 節子	統合失調症患者の母親の介護負担感に関連する要因 家族内外の支援状況と家族機能の関連	日本社会精神医学会雑誌 16 巻 3 号 Page263-274	量的研究	質問紙調査・統計学的分析	統合失調症患者と同居する母親 53 名	統合失調症患者と同居する母親の介護負担感 (J-ZBI-8)、家族内外の支援状況 (SNQ)、家族機能 (GF-FAD) を明らかにする
21	2007	鈴木 砂由里	精神科救急病棟へ初回入院した母親の体験と不安が希望へと変容する看護援助 精神科救急入院科届出病棟がスタートして	日本精神科看護学会誌 50 巻 2 号 Page18-22	事例研究	半構成的面接・質的帰納的分析	精神科救急病棟へ初回入院した 15 歳 (中学 3 年生) 女性患者とその母親 1 組	母親の不安が希望へと変容し、積極的に治療を受け入れられるようになった過程を検討する
22	2006	福山 なおみ	在宅における精神障害者を持つ家族の困難体験の内容と対処および家族の力【第 1 報】	共立女子短期大学看護学科紀要 第 1 号 Page67-79	質的研究	半構成的面接・質的分析	精神科クリニックのデイケアを利用する統合失調症患者の家族 15 名	在宅における精神障害者をもつ家族の困難体験の内容と対処および家族の力について明らかにする
23	2016	田野中 恭子	統合失調症を患う母親と暮らした娘の経験	佛教大学保健医療技術学部論集 第 10 号 Page49-61	事例研究	半構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症を患う母親と暮らした娘 1 名	統合失調症を患う母親と暮らした娘の経験を明らかにする
24	2016	鎌田 由美子	統合失調症患者の家族支援に関する研究—家族教室に参加するまでのプロセスにおける心理的葛藤に焦点を当て—	日本看護学会論文集 精神看護 46 巻 Page67-70	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	1 施設の家族教室に参加した当事者 家族 4 名	統合失調症をもつ家族が家族教室へ参加するまでのプロセスにおける心理的葛藤を明らかにする
25	2016	宮崎 徳子	統合失調症患者の家族の病氣受容に関する SCAT (Step for Coding and Theorization) による分析	四日市看護医療大学紀要 9 巻 1 号 Page13-21	質的研究	インタビュー・SCAT 分析	1 都道府県の家族会会員の家族 3 名	統合失調症患者を家族成員に持つ家族の患者受容の過程を分析し、家族支援の効果的な方法を明らかにする
26	2015	宮城 哲哉	統合失調症患者を抱える家族の入退院志向に及ぼす影響要因の検討	琉球医学会誌 34 巻 1-2 号 Page35-43	量的研究	質問紙調査・記述統計 統計的検定	1 施設に入院中の患者 家族および外来通院中の患者の家族 379 名	患者に対する入退院志向に着目し、精神症状や介護上の困難、負担感、退院後の受け入れ意識との関連を明らかにする

(表 1 つづく)

表1 統合失調症患者家族の体験が記された文献の概要 (つづき)

文献番号	発行人	筆頭著者	表題	掲載雑誌	研究デザイン	データ収集・分析方法	研究対象	研究目的
27	2015	豊田 渉	家族の思いを聴く 家族心理教育から	日本精神科看護学術集会誌 58巻1号 Page98-99	事例研究	事例分析	1 施設の家族心理教育に参加した家族1名	家族心理教育の中でグループワークに参加した家族に対するかわわりを振り返る
28	2015	浜田 恭子	適応的な地域生活を営む統合失調症を有する子どもとの両親の体験の質的分析	鹿児島大学医学部保健学科紀要25巻1号Page1-9	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	地域生活を送る当事者1名の両親	地域で適応的な生活を送る統合失調症を有する子ども、発症から適応的な生活状態に至るまでに、両親がその時々をどう受け止めて対応してきたのかを明らかにする
29	2014	高橋 万紀子	精神科病棟から初回退院した統合失調症者と暮らす親の在宅移行期の体験 - 地域生活を継続する統合失調症者の親のインタビューから -	家族看護学研究 20巻1号 Page26-37	質的研究	半構成的面接・KI法	統合失調症者を主にケアしている親12名	初回退院した統合失調症者と暮らす親の、在宅移行期の体験を明らかにする
30	2013	横山 恵子	精神障害者家族会入会までの心理的变化と家族会で得たもの 若年層の統合失調症患者の親へのインタビューから	保健医療福祉科学 3巻 Page7-13	質的研究	半構成的面接・エスノグラフィ	家族会に所属する母親15名、父親2名	精神障害者家族会の若年層の統合失調症患者の親の家族会入会から現在までの経験を明らかにする
31	2013	岩崎 みすず	統合失調症の子どもをもつ父親 病気への対処と向き合い方	日本健康医学会雑誌 22巻1号 Page36-42	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症の子どもをもつ父親3名	父親の、子どもと病気への対処と病気との向き合い方を明らかにする
32	2013	平 祥子	日本における統合失調症患者家族の統制ごとの精神的負担の特徴 : 過去10年間に刊行された文献の内容分析から	大阪大学看護学雑誌 19巻1号 Page9-15	文献研究	統合失調症と精神症状を伴う障害および家族心理をキーワードに医中誌で検索、内容分析	2001年から2010年までの論文18本	2011年までの10年間の日本における先行研究を分析することで、統合失調症患者家族の統制ごとの精神的負担の特徴を明らかにする
33	2013	吉井 初美	我が国の初発統合失調症患者の母親に関する研究 動向と支援課題	東北大学医学部保健学科紀要 22巻1号 Page1-6	文献研究	家族Or母親、統合失調症をキーワードに医中誌で検索	2001年から2012年までの論文7本	統合失調症患者の母親に関する研究動向から母親への支援の課題を明らかにする
34	2013	川口 めぐみ	統合失調症患者の家族が抱える介護負担 入院中から退院1年未満に焦点を当て	日本看護学会論文集: 地域看護 43号 Page51-54	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	1 施設を退院後1年未満の統合失調症患者の家族5名	統合失調症患者の入院中および退院から1年未満において家族が抱える介護負担を明らかにする
35	2012	石田 実知子	統合失調症きょうだいの思いの変化に焦点をあてて 精神障害者きょうだいの手記分析から	インターナショナル Nursing Care Research 11巻3号 Page57-67	質的研究	手記分析	統合失調症のきょうだい23名が執筆している手記「精神障害のきょうだいがいます」(2005)	きょうだいの精神疾患の発病から手記を書いた時点まで、きょうだいが目の前の出来事やどのように認識し、感じ、対処しようとしてきたのか、さらには、それらを自分自身の中でどのように意味づけていったのか思いの変化を明らかにする
36	2012	田中 友康	精神科救急入院によって家族が対峙する不安の構造	日本看護学会論文集: 精神看護 42号 Page38-41	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	精神科救急病棟に警察官通報にて受診し、入院となった初発統合失調症患者の親12名	精神科救急病棟に警察官通報にて受診し、入院となった初発統合失調症患者の親が対峙する不安の構造を明らかにする
37	2011	川添 郁夫	統合失調症の子供を持つ母親の適応に影響を与えた要因	青森県立中央病院医誌 56巻3号 Page91-10	質的研究	グループインタビュー・アプローチ	発症後5年以上経過した統合失調症患者9名の母親	家族にとって子供の統合失調症発症がどのような体験であったのか、その後の適応に影響を与えた要因はなんであったのかを明らかにする
38	2010	菊池 由莉	統合失調症患者の親におけるケア役割受容過程の検討	広島大学心理学研究 9号 Page217-227	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症患者の親13名	統合失調症患者家族における役割受容過程を検討する

(表1つづく)

表1 統合失調症患者家族の体験が記された文献の概要 (つづき)

文献番号	発行年	筆頭著者	表題	掲載雑誌	研究デザイン	データ収集・分析方法	研究対象	研究目的
39	2010	植崎 智子	初回入院の統合失調症患者をもつ母親の思い、3事例を通して家族支援を考える	日本精神科看護学会誌 53 巻 2 号 Page179-183	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症で急性期病棟に入院となった患者の家族 3 名	初回入院の統合失調症患者の家族の思いを理解することで、精神障がい者の家族に添った支援を行うために家族の思いを明らかにする
40	2009	岩崎 みすず	統合失調症患者のきょうだいとしての体験 語りの分析から	日本看護研究学会雑誌 32 巻 4 号 Page101-109	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症の兄弟がいる家族メンバー 8 名	統合失調症患者のきょうだいの体験を明らかにする
41	2009	藤野 成美	統合失調症患者の家族介護者における介護経験に伴う苦悩	日本看護研究学会雑誌 32 巻 2 号 Page35-43	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	精神科訪問看護ステーションを利用する統合失調症患者の家族 23 名	長期入院を経験した統合失調症患者の家族介護者が抱える苦悩の具体的内容を明らかにする
42	2008	宮崎 宏一	精神科初回入院患者家族の思い	福井県立病院看護部研究発表集録平成 20 年度 Page48-53	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症で初回入院した患者の家族 7 名	入院に至ったエピソードや入院後の家族の思い・体験を明らかにする
43	2008	津森 有香	20 歳から 30 歳代の統合失調症患者と共に暮らす家族の思い	日本看護学会論文集：地域看護 39 号 Page42-44	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	1 クリニックに入院する統合失調症患者の家族 4 名	20 歳から 30 歳代の統合失調症患者と共に暮らす家族がどのような思いを持って患者を支えているのか明らかにする
44	2008	板垣 裕美	急性期治療病棟での家族支援を考える 家族教室参加後の家族の思い	日本精神科看護学会誌 51 巻 2 号 Page227-231	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	家族教育に参加した家族 1 名	家族に対しビデオによる疾病教育を実施、後の面接から疾患や患者への思いを明らかにする
45	2008	郡司 留美子	初回入院の統合失調症患者に接する親の心情 入院 1～3 ヶ月の時点での親へのインタビューを通して	日本精神科看護学会誌 51 巻 2 号 Page217-221	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	初回入院となった統合失調症患者の家族 6 名	初回入院となった統合失調症患者に接する親の心情について明らかにする
46	2008	吉井 初美	初発統合失調症の子を持つ母の心理	日本精神保健看護学会誌 17 巻 1 号 Page113-119	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	初発統合失調症の子を持つ母 5 名	子の受診 1 ヶ月前から退院後半年以内の母の心理を明らかにする
47	2007	川添 郁夫	統合失調症患者をもつ母親の対処過程	日本看護学会誌 27 巻 4 号 Page63-71	質的研究	半構成的面接・修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)	統合失調症を発症した子どもをもつ母親 9 名	発症後 5 年以上の統合失調症患者をもつ母親の対処過程と情動を明らかにする
48	2007	水野 泰尚	統合失調症をもつ患者を抱える家族の精神的負担と有効なサポートの構造を探索	上智大学心理学年報 31 巻 Page65-82	質的研究	半構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症の患者と同居する家族 6 名	統合失調症をもつ人の家族の精神的負担と有効なサポートを明らかにする
49	2007	川添 郁夫	統合失調症の子供を持つ母親が体験する自己成長過程	日本精神保健看護学会誌 16 巻 1 号 Page23-31	質的研究	半構成的面接・修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)	発症後 5 年以上経過した統合失調症患者と同居する母親 9 名	母親が子どもの統合失調症発症をどのようにとらえて自己成長を感じ取ったのか、自己成長過程に影響を及ぼした要因は何か明らかにする
50	2006	甘佐 京子	若い統合失調症患者をもつ父母の生活困難度および家族機能	家族看護学研究 12 巻 1 号 Page11-21	量的研究	質問紙調査・記述統計 統計的検定	統合失調症の子どもをもつ親 68 名	青年期から成人前期の統合失調症患者をもつ父母の抱える生活上の困難を明らかにする
51	2005	川原 義博	統合失調症の息子をケアし続ける母の語り	公立能登総合病院医療雑誌 16 巻 Page23-26	質的研究	構成的面接・質的帰納的分析	統合失調症の息子と暮らす母親 1 名	母親の語りから実際の家族ケアを明らかにする

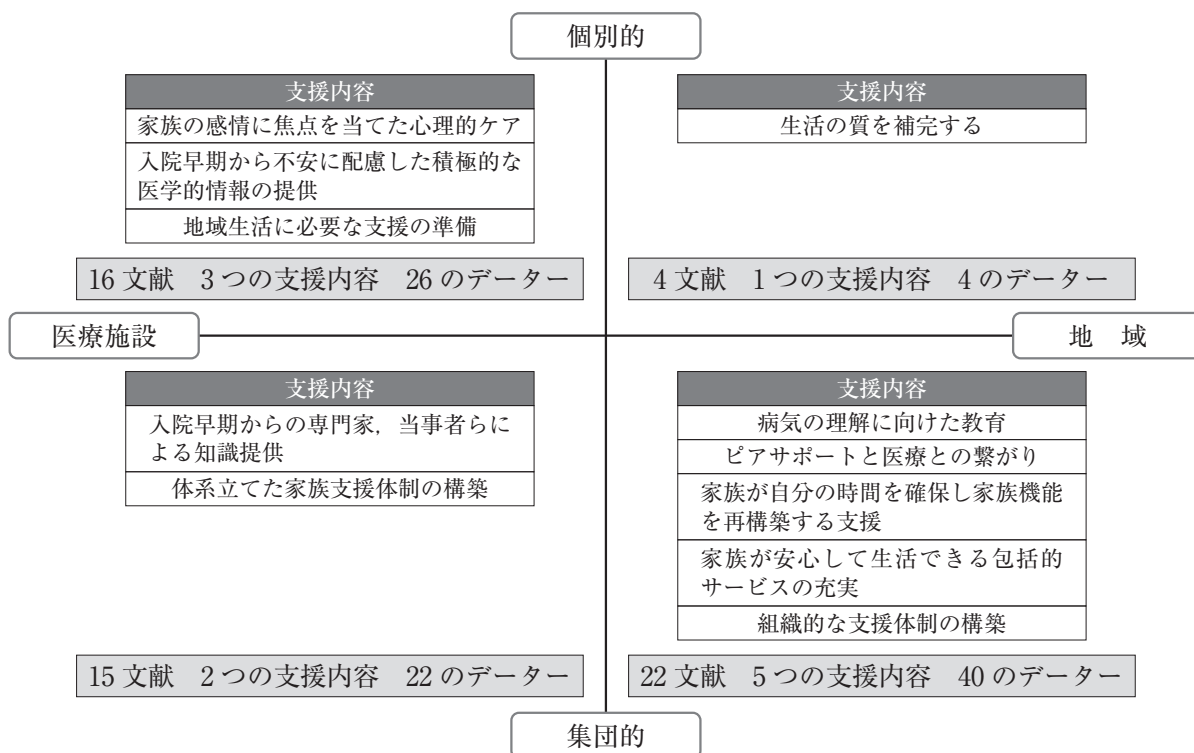


表2 統合失調症患者家族の体験に基づく支援（場と対象による4分割）

当てて家族の体験を明らかにした。

以下、統合失調症患者を当事者と記す。

1. 当事者の家族支援の整理（表2）

当事者の家族の体験を示した文献51件の結果および考察から、家族支援について記述された内容を抽出した。抽出した支援内容は類似性に基づき抽象化しそれぞれ支援内容を4分割に振り分けた。医療施設における個別的支援は16文献26のデーターから3つの支援内容、医療施設における集団的支援では15文献22のデーターから2つの支援内容、地域における個別的支援は、4文献4のデーターから1つの支援内容、地域における集団的支援では、22文献40のデーターから5つの支援内容に分類された。

当事者の家族支援の整理の結果から、家族の体験をもとに地域での個別的な家族支援に関して示唆された先行研究が十分ではないことが明らかとなった。

4分割したそれぞれの具体的な支援内容については、以下に述べる。なお、【】は支援内容を示し、支援内容中の（）は抽出したデータ

ーの数、そしてより具体的に説明するため代表的な文献の一部を文中に示す。

1) 医療施設における個別的支援

当事者の家族に対する医療施設における個別的支援は、【家族の感情に焦点を当てた心理的ケア（12）】【入院早期から不安に配慮した積極的な医学的情報の提供（10）】【地域生活に必要な支援の準備（4）】が必要な支援内容として示されていた。具体的には【家族の感情に焦点を当てた心理的ケア】では、郡司らによる入院1から3か月の時点での親の心情を明らかにした調査から家族の後悔や不安を払拭するケアの提供の必要性や、川添の当事者の母親の恐怖体験に焦点を当てた調査により早期に心理的ケアを行うことの重要性が示されていた。【入院早期から不安に配慮した積極的な医学的情報の提供】は、宮崎らによる家族の病気受容に関する語りから精神医療の初期情報開示の必要性が示されるなど、入院後の早い段階で家族に対する情報提供の重要性を示していた。また、高橋らは当事者と暮らす親の在宅移行期の体験についての語りから、家族ケアには地域の相談窓口

繋ぐなど入院中から医療と福祉の連携が必要であることを指摘し【地域生活に必要な支援の準備】が家族支援につながることを示していた。

2) 医療施設における集団的支援

当事者の家族に対する医療施設における集団的支援は、【入院早期からの専門家、当事者らによる知識提供 (19)】【体系立てた家族支援体制の構築 (3)】が必要な支援内容として示されていた。具体的には、川口らは、当事者の親の介護負担感の関連要因を分析した。その結果、情報を集める努力をしている家族ほど介護負担感は低いことが明らかとなり、家族心理教育など【入院早期からの専門家、当事者らによる知識提供】の重要性を指摘している。また【体系立てた家族支援体制の構築】として、宮城らは、当事者家族の心的外傷に焦点を当て精神的健康を調査した結果、家族に対するグループ療法の有効性と家族を社会資源に繋ぐためのシステム化の必要性を示唆していた。

3) 地域における個別的支援

当事者の家族に対する地域における個別的支援は、【生活の質を補完する (6)】が必要な支援内容として示されていた。具体的には、田野中らは、幼少期に当事者と生活した経験のある家族に当時の経験を回想する方法でインタビューした結果、当事者と暮らす子どもの支援では生活を支援する必要があると示され、宮城らによる当事者家族の入退院志向に影響する要因を検討した調査では、介護負担を考慮した上で当事者と家族の適切な距離感を保つことができるよう、その家族に見合った社会資源提供の重要性が示されていた。

4) 地域生活における集団支援

当事者の家族に対する地域における集団的支援は、【病気の理解に向けた教育 (5)】【ピアサポートと医療との繋がり (12)】【家族が自分の時間を確保し家族機能を再構築する支援 (10)】【家族が安心して生活できる包括的サービスの充実 (9)】【組織的な支援体制の構築 (4)】が必要な支援内容として示されていた。具体的には、半澤らは、家族会の会員に対して当事者の母親の介護負担に関連する要因を分析した。そ

の結果から負担感を軽減するためには、家族が当事者と良好な関係性を維持するための具体的な対処能力を習得できるよう、より実践的なプログラムの必要性を示唆するなど、【病気の理解に向けた教育】の必要性を示していた。また、横山による、家族会入会までの当事者家族の心理的变化を調査した結果では、家族会入会までに混乱や家族会入会への抵抗がある為、未入会家族に対する家族会による電話相談や学習会など、医療の現場と家族会が連携を取り社会資源を充実させていくなど【ピアサポートと医療との繋がり】の重要性が示されていた。更に、当事者と生活する親の体験から、これまでの生活スタイルを維持できるような時間と場所の確保や当事者と一定の距離を図り関係性が維持できるよう【家族が自分の時間を確保し家族機能を再構築する支援】が必要であることが示唆されており、浜田らや菊池らの調査がこれにあたる。また、藤野らや半澤らが、当事者家族の介護負担について調査した結果、人的・物的・経済的・社会サポートの充実が当事者の自立には必要であり、当事者がサポートを得ながら自立していくことが、ひいては家族の支援につながるなど【家族が安心して生活できる包括的サービスの充実】を必要としている。最後に、【組織的な支援体制の構築】の必要性について、水野らは、当事者の家族の精神的負担に対する有効なサポートに関する調査の中で、地域の中で緊急支援の窓口の設置や地域に根差した包括支援システムが実施されるよう体制の構築の必要性を示しており、地域生活において当事者の家族の支援を考慮した場合、体系立てた組織的な取り組みが必要不可欠であることを示唆されていた。

2. 当事者の家族の混乱時期における体験

1) 当事者の家族の混乱時期における体験の研究

当事者家族の体験を示した51文献から、混乱時期の体験を含んだ内容となっている29文献を抽出した。どのような視点による研究であるかを概観すると、家族の心理過程が8件、家族の体験の経緯が4件、病気に対する受容過程が4件、家族の精神的負担が4件、家族へのケ

ア・支援が3件、家族の病気に対する受け止めが2件、家族研究の動向が1件、家族の自己成長過程が1件、家族機能が1件、家族の入退院志向が1件であった。研究対象者は、当事者の両親が15件と最も多く、次いで母親が7件、親や兄弟そして配偶者が3件、兄弟が2件、父親および子どもが各1件であった。当事者の子どもの文献は、当事者である親と暮らした経験のある成人の対象者が、幼少期の体験を想起する形の調査となっていた。当事者の家族の研究は、患者の両親、特に母親に対する研究が多いことが明らかとなった。

2) 混乱時期における当事者の家族の体験 (表3)

29件の文献から混乱時期に焦点を当て家族の体験を抽出した結果、508のデータが抽出された。データの類似性の観点から帰納的に分析し、最終的に【家族の変調に対する対処困難】【スティグマが招く憂い】【家族のきずなが崩壊する危機】【発症に対する自責の念】【当事者との生活が限界に達してからの援助の希求】【資源に対する渴求】【医療介入により感じる緊張からの解放】の7つのカテゴリーに集約された。なお、帰納的に分析するにあたり、榊¹²⁾の家族システムの健康の5つの構成要素を参考にした。以下、《》はサブカテゴリー、『』の斜体はコードとし、カテゴリーを象徴する代表的な記述をそれぞれ示す。

(1) 家族の変調に対する対処困難

家族の変調に対する対処困難は、《当事者の言動に翻弄され疲弊した生活》《家族の変調から目を反らし普通を装う生活》から構成された。《当事者の言動に翻弄され疲弊した生活》について、藤野らの調査にみられる当事者と暮らす父親の語りがそれを象徴していた。父親は、『夜中にたたき起こされて、出ていけと言われて出ていかされたときもある』『ボヤ騒ぎもあったし、とにかくすごかった・・・こんなときどうしたらいいのかほんとに辛い』としていた。また、《家族の変調から目を反らし普通を装う生活》については、母親は『娘の異常な変化を特別な能力を持っている』と当事者である娘について語るなど、宮崎らの調査から抽出した当事者の親の語りが象徴的であった。

(2) スティグマが招く憂い

スティグマが招く憂いは、《精神疾患に対するスティグマが招いた負のスパイラル》《精神疾患であるがゆえに生じる不安や嫌悪感》から構成された。《精神疾患に対するスティグマが招いた負のスパイラル》は、川添や浜田らの調査にみられた当事者の親の語りが象徴的であった。親自身の精神疾患に対する語りには、『この家から、この私から自分でも病気を卑下しているんだけど、精神病になったっていう人を出しちゃいけない』といったセルフスティグマと、『精神って言うと嫌な顔をされるから、夫

表3 混乱時期における統合失調症患者の家族の体験

家族の変調に対する対処困難 (144)	当事者の言動に翻弄され疲弊した生活 (99)
	家族の変調から目を反らし普通を装う生活 (45)
スティグマが招く憂い (131)	精神疾患に対するスティグマが招いた負のスパイラル (77)
	精神疾患であるがゆえに生じる不安や嫌悪感 (54)
家族のきずなが崩壊する危機 (125)	家族関係が破たんするほどの恐怖生活 (119)
	無理やりの入院による当事者との関係性崩壊の懸念 (6)
発症に対する自責の念 (48)	発症の原因を家族に関連づけることで抱く自責の念 (48)
当事者との生活が限界に達してからの援助の希求 (25)	当事者との生活が限界に達してからの援助の希求 (25)
資源に対する渴求 (19)	家族ケアに関する医療者への要望 (17)
	経済的な負担 (2)
医療介入により感じる緊張からの解放 (16)	医療介入による当事者との緊張状態からの解放 (16)

婦2人だけで話すか、自分の胸の中だけにしま
う』といった世間のスティグマにより、苦しみ
や他者に相談できない現状を引き起こしてい
た。そして、《精神疾患であるがゆえに生じる
不安や嫌悪感》は、川添や菊池らの調査にみら
れた母親の語りの記述が象徴的であった。母親
は、『精神病院にいけば就職もできなくなるし
進学もできなくなるし結婚もできなくなると反
対した』と、受診を拒み未治療期間を延長して
いた。そして、当事者の病名を知らされた母親
は『精神疾患だとわかった時は、笑いも途切れ
たし、毎日泣いて・・・この子の将来はどの
よかって悲観的になった』とし、また別の親
は病名を知った時の感情を『出口のないトンネ
ル』と表現しており、精神疾患であるかゆえに
抱える憂いを体験していた。

(3) 家族のきずなが崩壊する危機

家族のきずなが崩壊する危機は、《家族関係
が破綻するほどの恐怖生活》《無理やりの入院
による当事者との関係崩壊の懸念》から構成さ
れた。まず、《家族関係が破綻するほどの恐怖
生活》は、川添、石田、田野中ら、吉井らの調
査での家族の語りが象徴的であった。当事者の
母親は『夜中に、物音がして、ナイフとかもっ
て立ってたりして、恐ろしくて、恐怖も加わっ
て泣きたい気分と怖い気分とどうしようもなか
ったです』と入院前の生活を語り、当事者との
生活は『家庭の破滅を予感させるほどの恐怖体
験として残っている』という。また、病に侵さ
れた母親を持つ子どもは、入院前の生活を『母
親が何をするか分からないから、とにかく弟の
手を引いて逃げようと思って、夜中でも逃げた』
と壮絶な体験を想起していた。入院前の当事者
との生活を家族は次のように語っている。兄弟
は『自分にとって姉はこの世で一番恐ろしいモ
ノでした』と表現し、母親は『子どもとの生活
は、とても暗く死の淵を見ているようだった』
として恐怖生活を語っていた。次に、《無理や
りの入院による当事者との関係崩壊の懸念》は、
郡司ら、石田、浜田らの調査での家族の語り
が象徴的である。当事者の親は、入院に際し『ム
リやり入院させて恨んでいるのではないか』と

感じ、『やっぱり、ここに来るのが嫌だった。
どんな顔をして会えばいいのか、どう声をかけ
たらいいのか精神科の入院に当惑した』と語っ
ている。また、当事者を妹に持つ家族は、当事
者から『お姉ちゃんが病院に連れて行かなけれ
ば、私は病気にならなかったと恨まれた』と語
り、当事者を入院させたことで生じる関係性悪
化への懸念を抱いていた。

(4) 発症に対する自責の念

発症に対する自責の念は、《発症の原因を家
族に関連づけることで抱く自責の念》で構成さ
れた。吉井らは、統合失調症患者の母親に関す
る研究動向を調査している。その結果、『精神
疾患は遺伝病だという決め付けが社会に存在す
る』ことが母親を苦しめているとしている。ま
た、川添の調査の中で、母親は『親の育て方が
悪かったのかと苦悩する』ことが明らかとさ
れ、統合失調症の発症により家族が抱える自責
の念が示されていた。

(5) 当事者との生活が限界に達してからの援助 の希求

当事者との生活が限界に達してからの援助の
希求は、《当事者との生活が限界に達してから
の援助の希求》で構成された。これは、水野ら、
岩崎ら、浜田らの調査で示された家族の体験が
象徴的である。入院前、家族は当事者の奇異な
行動に『夜中も心配で眠れない。へとへとにな
るまで付き合っ、それでだめなら病院に連れ
て行こう』と限界まで家族間で何とかしようと
していた。また、当事者の『結局もう、乱暴す
るからって、親戚の人に来てもらって、それで
押さえつけて余計に興奮して、暴れるんですよ』
『祖母や母親に対する暴力があって警察を呼ん
だ』『自宅がたかいところにあるから飛び降り
自殺とか・・・病院なら安心』など、当事者の
他害行為や自傷行為の事象をきっかけに他者へ
の援助を求めている。

(6) 資源に対する渴求

資源に対する渴求は、《家族ケアに関する医
療者への要望》《経済的な負担》から構成され
た。《家族ケアに関する医療者への要望》は、宮崎
らや川口らの調査の家族の語り
が象徴的であっ

た。家族は『医療職からの家族に対する支援と
言うんですかね、あれば』と語り、『本当はも
っと時間をかけて医療者に話を聴いてほしい』
と医療者からの支援を求めていた。また《経済
的な負担》について、田中による家族の不安を
明らかにした調査では『家族成員の収入がなくな
ることによる治療費の心配』を抱えているこ
とが明らかとなり、浜田らによる家族の体験を
明らかにした調査では『他の子どもの学費もあ
るから金銭面では本当に苦勞した』と経済的な
負担についての体験を語っていた。

(7) 医療介入により感じる緊張からの解放

医療介入により感じる緊張からの解放は、
《医療介入により感じる緊張からの解放》から
構成された。吉井は、当事者の母親の心理を明
らかにした。その結果、『入院になって肩の荷
が下りた』『入院により、責任が和らいだ』と
の語りが見られ、家族は当事者の入院をきっか
けに医療に繋がったことによって緊張と責任か
らの解放を体験していた。

VII. 考察

当事者の家族の体験をもとに必要とされる支
援を記した文献の整理および家族の体験を混乱
時期に絞り集約した結果から、それぞれ家族支
援の課題と方略について述べる。

1. 当事者の家族の体験から示された家族支援

51 文献から支援内容を整理すると、家族へ
の地域における集団的支援が、最も多く挙がっ
ていた。これは、患者の地域移行に伴って地域
生活を共に過ごす家族への支援への高まりが関
連していると考えられる。我が国では、医療施
設や地域における家族会の存在が、精神障害者
を抱える家族の地域生活にとって大きな支えに
なっている。実際、坪川ら¹³⁾の家族が家族会
で経験したピアサポートの内容に関する調査によ
ると、「閉じ込めていた思いを吐露する」「苦
境を体験した者同士の自然な受容がある」など、
当事者の家族同士（ピア）だからこそ可能とな
る安心感の中での感情の吐露が示されていた。
また「病状悪化の時の助けを期待できる安心を
得る」といった精神症状の再燃に対する不安の

軽減などが明らかとなり、当事者の家族同士が
支えあう（ピアサポート）様相が窺えた。地域
で生活する家族にとって相互に助け合う家族会
は、家族支援として中心的な役割を担っている。
しかし、2012 年の全国精神保健福祉連合会の
家族会全国調査¹⁴⁾によると、4 割の家族会が
20 人以内の小規模な組織であり、新規に加入
する会員の減少や会員の高齢化に伴って、家族
会の運営組織のマンパワー不足が課題とされて
いる。新規に加入する家族の減少は、各地域の
家族会そのものの情報不足や当事者の疾患を家
族が受け入れられないなどの現状から、当事者
の家族は家族会の入会にためらいがあるのでは
ないかと考える。

混乱時期における統合失調症患者の家族の体
験にある【資源に対する渴求】は、医療だけで
なく、福祉サービスの充実が必要であることを
示している。障害者総合支援法における市町村
の自立支援給付や都道府県の地域生活支援事業
は、精神障害をもつ当事者を対象としたサービ
スである。家族への地域における個別支援は、
居宅介護や訪問看護などのサービスを提供する
相談員や支援者が対象者にサービスを提供する
際に、必要に応じて家族支援を実施しており、
家族支援がサービスを提供する相談員や支援者
に委ねられている。したがって、患者の地域移
行に伴って地域生活を共に過ごす家族の支援を
充実させるためには、精神障害をもつ当事者だ
けでなく、市町村や都道府県による当事者をも
つ家族を対象とするサービスが必要であると考
える。以上のことから、地域における家族支援
は、医療施設や地域における家族会が、中心
的な役割を担っているが十分になされていると
はいえないため、家族会などの集団的支援だけ
でなく、市町村や都道府県による個別的支援が
重要になると考える。家族に対する地域におけ
る個別支援は、本研究での文献検討でも抽出さ
れた文献が少ないため、今後、この分野での探
求が必要であると考える。

医療施設における家族支援は、心理教育や疾
病教育などの個別のおよび集団的支援が示され
ていた。医療施設は、家族を患者の治療の協力

者であるとし、家族の役割を期待しているため、家族が当事者の心理や疾病の理解ができるよう家族の教育を行っている。また家族に医療的なケアが必要な場合には、個別的な治療やケアがなされている。

医療施設における家族に対する心理教育や疾病教育は、援助関係の形成とコミュニケーションを通して、当事者と環境の機能不全の改善や生活上の課題を改善する心理社会的アプローチ (Psychosocial approach) のひとつである。Christopher¹⁵⁾ は、統合失調症の家族教育の障害として、社会資源の不足と共に家族のもつスティグマや家族の希望の欠如など家族の感情を挙げている。この指摘は、混乱時期における統合失調症患者の家族の体験の文献にも散見され、《家族ケアに関する医療者への要望》に医療者の支援を求めていることが示されている。したがって、家族が患者の治療の協力者になるためには、家族の心身の機能が、患者の行動や治療の知識を習得できる状態 (レディネス) にならなければならない。家族に対する心理教育や疾病教育の実施については、家族のレディネスと陰性感情に十分な配慮をしたアプローチが必要になると考える。

本研究の結果では、医療施設における家族への個別支援の中には家族の感情に焦点を当てた心理的ケアも示唆されていたが、実際の医療現場の中では、家族をケアの対象者として捉え家族の体験に基づいた心的外傷に対する個別的な支援の方法が体系的に整っていないのが現状である。今後は、医療施設においても家族の個別の支援、ひいては医療施設から地域につなぐことができるような家族の個別的な支援の体系化の探究が急務であると考えられる。

2. 混乱時期における当事者の家族の体験の特徴と支援

混乱の時期における当事者の家族の体験を調査した研究は、家族の心理的過程や家族の体験の経緯など、家族の心理面に視点を置いた調査が多く実施されている。研究対象者については、ほとんどが当事者の両親であり特に母親に対する調査が多く、統合失調症が比較的若い時期に

発症するという背景から、家族の中でも両親が主要な介護者となる傾向にあることを示している。

当事者の家族にとって家族成員の統合失調症の発症は、本研究における家族の体験の【家族のきずなが崩壊する危機】が示すように、家族を危機状態に陥らせ家族の不健康を引き起こす出来事である。榊¹⁶⁾ は、家族の健康について「信頼に基づくきずな」「協力し合いながらの調整活動」「環境への適応性」「時間空間の共有」「役割達成性」と5つの構成要素を挙げている。危機的状况に陥った家族が健康を取り戻すために、新しい家族それぞれのライフスタイルや役割を構築することが大切であり、家族成員の変化に伴って他の家族成員も柔軟に変化できるような支援が必要である。しかし「信頼に基づくきずな」や「協力し合いながらの調整活動」など家族の凝集性にかかわる点については、混乱時期の体験が大きく影響し家族が健康を取り戻す過程を阻害していると考えられる。この点、三上¹⁷⁾ による一般家庭と精神障害者を抱える家族のシステムとしての健康を比較した調査において、精神障害者を抱える家族成員は、そうでない家族に比べて不健康であることが明らかとなっており、特に「信頼に基づくきずな」「協力し合いながらの調整活動」に影響をもたらす対処方法を家族自身が行なえていないとされていた。本研究において明らかとなった混乱時期の家族の体験が癒されないまま、症状が落ち着いた回復期の時期においても再燃の恐怖や当事者への不信を抱きながら生活していることが推察される。

混乱時期の当事者の家族は、当事者の変調によって翻弄され疲弊した生活を余儀なくされている。家族は予測ができない当事者の行動に様々な対処を試みるが、本研究における家族の体験の【資源に対する渴求】や【スティグマが招く憂い】が示すように、家族自身や世間の精神疾患に対するスティグマが第三者への相談や医療機関への相談など建設的対処の妨げになっていることが推察される。その結果、家族は家族関係が破綻するほどの恐怖生活を送りながら

も限界まで医療機関に助けを求めず抱え込んでいるのではないかと考える。2010年の精神障害者の自立した地域生活を推進し家族が安心して生活できるようにするための効果的な家族支援等の在り方に関する調査研究の報告書¹⁸⁾によると、当事者が初めて精神科を受診した際に、約9割の家族が精神疾患についての知識がなかったと回答しており、病気についての知識があれば対応が違っていただと感じている家族は6割以上に及んでいた。このような背景から、未治療期間延長に伴う当事者の病状の深刻化や当事者を抱え込む家族の心的な外傷体験を未然に防ぐために、地域において広く精神疾患への理解を促す活動が必要であり、現在、厚生労働省により推進されているこころのバリアフリー宣言¹⁹⁾の指針に従って、精神疾患知識の普及及び啓発を積極的にすすめる必要がある。具体的にはオーストラリアなど諸外国にみる²⁰⁾小中学生など若年層からの精神保健啓発プログラムの導入といった取り組みを参考に、学校教育の中でも比較的早い初等教育から対象の発達段階に応じた方法での疾病理解の促しや精神保健に関する相談窓口の提示を継続的におこなっていくことは、精神保健に関する啓発と知識定着には有効であると考え、ひいては変調をきたした当事者の早期受診に繋ぐことが可能となる。

医療施設においても、家族は当事者との生活に恐怖や疲弊を感じ関係性崩壊の懸念を抱きながらも、やっとの思いで医療に繋いでおり、十分にケアを受けるべき存在として支援にあたる必要がある。医療施設の看護師は、入院早期から家族に対する心理的・社会的要素を含んだアセスメントをおこなう必要があり、入院までに家族がどのような体験をしてきたのか、それに対してどのように認知しているのか、精神疾患をどのように認識しているのか、また、家族自身がどのような生活困難を抱えているのかを丁寧に確認し、家族自身がリカバリーに向かえるよう十分アセスメントし支援につなぐことが重要であると考え。そして、当事者の社会復帰に伴って家族も継続した支援を受けることができる体制が必要である。その為に、家族への支

援を医療施設から地域が引き継ぐことができるよう地域における家族支援の窓口と支援体制の構築が急務である。

3. 本研究の課題

研究の限界として、本研究は文献研究であり家族の体験の意味づけを考えた時、データの補完ができない。このことから、今後は当事者と生活を共にする家族の生の声を聴く必要がある。田野中²¹⁾は、複雑な問題を抱える統合失調症患者の家族を理解するためには「生きられた経験」の解釈を深めていく必要があるとしている。このように、本研究によって明らかにされた当事者の家族が抱える混乱時期の体験をもとに、その体験がどのように変化し意味づけられ、当事者と共に生活する上で家族にどのように影響しているのかといった体験の理解を深め、どのような時期にどのような支援が必要であるのか、家族にとってどのようなケア体験がパーソナル・リカバリーを促進するのかを丁寧に紐解いていくことが、必要な支援の在り方を検討するための一助となると考える。

今後、本研究の結果を基礎データとして活用しながら、地域生活を送る中で当事者と共に生活する家族が、どのような体験をしながら回復過程（リカバリー・ストーリー）を歩んでいるのか、地域における家族会でのフィールドワークを展開し、家族の生の声にふれる調査を続けることで、地域生活における個別的で具体的な視点での支援の在り方を探究していきたい。

VIII. 結論

統合失調症患者の家族の体験から家族支援について示した51文献を整理した結果、地域における家族の個別的支援について述べられた調査が十分でないことが明らかとなった。また、混乱時期における統合失調症患者の家族の体験を記した29文献を分析した結果、【家族の変調に対する対処困難】【スティグマが招く憂い】【家族のきずなが崩壊する危機】【発症に対する自責の念】【当事者との生活が限界に達してからの援助の希求】【資源に対する渴求】【医療介入により感じる緊張からの解放】の7つに集約さ

れた。家族も支援の対象者として捉え、医療施設においては入院早期から家族が抱える体験を丁寧にアセスメントし、支援に繋ぐ必要があり、地域においても家族のリカバリーを支える個別の支援の充実を目指し体制を整えることが課題とされた。

謝辞

本研究は、平成 28 年度獨協医科大学看護学部共同研究費（若手研究）の助成を受けて実施いたしました。研究へのご理解とご協力に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省：平成 21 年精神科病院退院患者の退院先の状況, www.mhlw.go.jp/stf/shingi/...att/2r98520000028t0u.pdf (2016-4.24 閲覧)
- 2) 特定非営利活動法人全国精神保健福祉連合会：「平成 21 年度家族支援に関する調査研究」, 平成 21 年度厚生労働省障害者保健福祉推進事業障害者自立支援調査研究プロジェクト, 2010.
- 3) 池淵恵美, 佐藤さやか, 他：統合失調症の退院支援を阻む要因について, 精神神経学雑誌, 110(11), 1007-1022, 2008.
- 4) 石原恵子：退院に向け家族の意志決定を支える看護 退院を受け入れることができない家族へのかかわりをとおして, 日本精神科看護学会誌, 52(2), 302-306, 2009.
- 5) 富永泰規, 太田保之, 他：初発分裂病患者の精神科施設受診までの経路について, 精神医学, 32(10), 1079-1085, 1990.
- 6) 安部秀三, 高沢彰, 他：統合失調症における受診経路および初発症状に関する調査, 精神神経学雑誌, 116(12), 969-981, 2014.
- 7) 半澤節子：精神障害者家族研究の変遷—1940年代から2004年までの先行研究—長崎純心大学短期大学部人間文化研究 3, 65-89, 2005.
- 8) 中坪太久郎：統合失調症家族研究の展望, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 48, 2008.
- 9) 田野中恭子：統合失調症の家族研究の変遷, 立命館人間科学研究 23, 75-89, 2011.
- 10) 阿保順子・佐久間えりか編：統合失調症急性期マニュアル, 急性期精神科看護研究会, すびか書房, 2012.
- 11) 田上美千佳：家族にもケア—統合失調症初めての入院—, 31-49, 精神看護出版, 東京, 2004.
- 12) 榊由里：家族システムの健康を測定する尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, 日本赤十字看護学会誌 5, 48-59, 2005.
- 13) 坪川トモ子, 小林恵子, 他：神障害者の家族が家族会で経験したピアサポートの内容, 日本地域看護学会誌, 18(1), 47-55, 2015.
- 14) 公益法人全国精神保健福祉連合会：平成 24 年度「家族会」全国調査, 2012. https://seishinhoken.jp/files/view/articles_files/src/c733c66d8f4810cf7d3a334fc099dd9c.pdf (2017-12.26 閲覧)
- 15) Christopher, S/ 松島義博・荒井良直訳：統合失調症の家族教育方法論, 22-31, 星和書店, 東京, 2003.
- 16) 前掲載 12)
- 17) 三上勇氣：一般家庭と比較した精神障害者を抱える家族のシステムとしての健康とコーピングとの関連性, 家族看護学研究, 15(3), 30-39, 2010.
- 18) 厚生労働省・特定非営利活動法人全国精神保健福祉会連合会・家族支援に関する調査研究プロジェクト検討委員会：精神障害者の自立した地域生活を推進し家族が安心して生活できるようにするための効果的な家族支援等の在り方に関する調査研究の報告書, 2010.
- 19) 厚生労働省：心の健康問題の正しい理解のための普及啓発検討委員会報告書～精神疾患を正しく理解する～新しい一歩を踏み出すために～, 2004. www.mhlw.go.jp/shingi/2008/04/dl/s0411-7i_0001.pdf (2018-2.1 閲覧)
- 20) 厚生労働省：諸外国の精神保健医療福祉の動向, 2010. www.mhlw.go.jp/shingi/2008/06/dl/s0625-6c.pdf (2017-10.13 閲覧)
- 21) 前掲載 9)